

## 政策情報～斉藤俊幸の地方創生塾③

&lt;農林水産省&gt;

## 地域流通モデル構築支援事業

＝商工会による水産業の産業化～高知県土佐市＝

—地域再生マネージャー・斉藤俊幸—

地方創生戦略にある新交付金は今まであった補助事業以外への交付であり、それ以外は地域再生事業等で既にある事業を踏襲する。では雇用を作り、政策誘導による人口増加を図るためとして、地域再生事業にある[厚生労働省の地域雇用創造推進事業（パッケージ事業）](#)をもう一回実施するのだろうか。

パッケージ事業は有効求人倍率の低い8道県を中心に、求職者を対象に職業訓練を行ってきた事業だが、この事業により雇用創出を図ることは少し疑問だ。地域によっては3回目。また、10年ぐらいになるこのパッケージ事業の地域における今までの成果はどうなっているのか。この10年間の求職者たちに種はばらまかれたはずであり、担い手が成長しているのであれば、次は工業化、産業化の段階ではないだろうか。

地域における産業論は議論されるべきだ。ユズ飲料で成長してきた馬路村が再投資を繰り返した歴史が参考になる。鹿児島島の芋焼酎であれば小さな焼酎蔵の系統出荷体制を確立した南九州酒販の存在や、四つの小さな蒸留所で協同組合化した小鹿酒造の

成長方法も参考になるだろう。求職者のための職能教育、農家のための6次産業化以降の第2段階の地域戦略や再投資のあり方、そこが地方創生戦略に問われているのではないか。安易にパッケージ事業や6次産業化を繰り返してはいけないように思うがどうだろうか。

そこで、地方創生戦略で産業化による雇用創出をどう図るかを考える必要がある。私は2009年に高知県土佐市に総務省の地域力創造アドバイザーとして入った。「うるめイワシプロジェクト協議会」で議論を重ね、申請したのが平成21年度の農林水産省補助金「地域流通モデル構築支援事業（商店街活性化タイプ）モデル実証事業」だ。事業名は「宇佐漁港一本釣りうるめイワシの消費拡大と高知海洋高校との協働による商店街活性化モデルの構築」というもの。事業申請者は土佐市商工会宇佐支部。ここで小さな魚屋の「宇佐もんや」が生まれ、マイナス30℃の冷凍ができる小さな冷凍庫を手に入れ、高知海洋高校の指導を受け、うるめイワシの三枚おろしの真空パックの業務用商品の製造が始まった。

やがて周辺のスーパーでの惣菜

の原料供給という事業計画のめどが立ち、「企業組合宇佐もん工房」を設立。高知県と土佐市の補助金を受けて、旧鯉節製造協同組合の土地で、同組合の借入金を引き継ぎ、新工場建設にこぎ着けた。この間要した期間は3年。2回の投資を繰り返し、企業組合宇佐もん工房は地域を支える企業として今も成長を続けている。企業組合宇佐もん工房は全国中小企業団体中央会が編集する中小企業組合ガイドブックの活躍する組合の事例として取り上げられ、彼らを作る水産加工品は農水省食品産業局長賞も受賞した。

農水省事業で商店街を支援（定額700万円）、補助対象者も商工会と、なかなか良い事業だったが、この事業自体が仕分けの対象となり、この年を境に消えた。地方創生戦略では社会実験で方向性を定め、法人化し、さらなる再投資を行い育成する方法があるのではないかと思う。段階的な補助金による支援方法を考えてよいのではないか。

今話題の新交付金は今ある事業制度の対象とならない事業を対象とする。今はなくなってしまった地域流通モデル構築支援事業（商店街活性化タイプ）モデル実証事業の考え方、つまり市町村から商工団体への交付金から起業化に結び付けると言った考え方をもう1回、復活させてみるのも一つの手だ。

[<表紙・目次へもどる>](#)